

卒業論文の要旨

論文題目	明治美術団体の変遷～佐野常民の思想と制度の変化を中心に～
氏名	仲澤 裕彦
メジャー	博物館学
(要旨)	
<p>本論文は、日本で最初に設立された美術団体である龍池会と、同会の初代会頭である佐野常民、さらには龍池会の後継団体である日本美術協会について考察したものである。</p> <p>前半部分(第1章～第4章)では、龍池会について、概要や具体的な活動を述べつつ、同会が美術品の輸出政策を推進する組織であったことを明らかにした。一方、初代会頭に佐野常民が就任すると、常民の「帝室」に対する忠孝の思想の影響によって、輸出を推進する組織から、「帝室」を中心に置き日本美術の振興を目的とした組織に変化した。龍池会に強く影響を及ぼした思想を、常民がいかにして持つようになったのかということについて、常民が設立に深く関わった日本赤十字の前身である博愛社と、後に日本美術協会総裁に就任する有栖川宮熾仁親王の関係性から明らかにした。</p> <p>後半部分(第5章～第7章)では、龍池会の後継団体であり、1887年に創設された日本美術協会について検討した。特に、同会が開催していた美術作品の展覧会である美術展覧会と、同会が設立に深く関わった帝室技芸員制度の二点を中心に考察し、日本美術協会の全体像を明らかにした。</p> <p>まず美術展覧会については、龍池会が開催していた観古美術会の出品物や参加者の違いを検討しながら、美術展覧会が開催されていた時期の状況を踏まえ、二つの展覧会の違いとその変化を明らかにした。</p> <p>次に帝室技芸員制度に関しては、制度の成立を歴史的に紐解いた。当初は、選ばれた芸術家のほとんどが日本画家や工芸家だったが、1910年の帝室技芸員の選定に際しては、日本画家や工芸家などは対象外となり、洋画家の黒田清輝と写真家の小川一真が選ばれた。日本画家ではなく、洋画家と写真家が帝室技芸員に選任された理由について、佐野常民の死後の日本美術協会の動向と他の美術団体との対立構造、さらには選ばれた二人の芸術家について考察することにより明らかにした。</p> <p>これらの明治期に創設された美術団体の研究は、現在あまり行われていないように思われる。また、日本美術協会は現在でも続いている歴史の長い美術団体であり、今後さらなる研究をしていく必要があると考えている。</p>	
(指導教員の推薦のコメント)	
<p>本論文は、明治期における美術団体と美術界の関係に焦点を当てた研究である。具体的には、現在まで続く日本美術協会およびその前身である龍池会を対象とし、それらの団体の活動や理念が、同時代およびその後の美術界にいかなる影響を与えたのかを明らかにしたものである。特に、龍池会の創設に携わり、同会の活動方針に多大な影響をもたらした佐野常民の思想に注目し、天皇制とも絡めながらその背景に迫ったことが、本論文の最大の特徴であるといえる。龍池会および日本美術協会に関する先行研究に基づいて明確な問題設定をしたうえで、一次資料にもあたりながら具体的に解き明かそうとしている点は評価される。よって優秀卒業論文に推薦するものである。</p>	